

和田節定編輯

開明小說

春雨文庫

第四號

下

20

25

30

35

A448  
8

春雨文庫第四編卷之下

東京

和田定節著述

第十四回

吉野よしのざくらざくらの吹風ふきかぜの除よけても花はなのうつらひひて今いまと  
 盛さかりの八重やへ櫻ざくら八重やへ山吹やまぶきみ梨なし李なしの花はなも世間よこの春はる  
 み似にぬ沼ぬまと埋うめての家いへとたて田とと潰つぶしての町まちみ為い  
 て開ひらく港みなとの繁さか昌さかふル西にし洋やう各かく國こく亞あ米めい理り加か人にん芥かい子し

48-7540

坊主黒ン坊本朝諸國の商法人外國館と見物の  
道者入り込む朝夕ふ賑をひ増して家増せを樹  
木と植る寸地をせけれど愛るふ餘る春の日の  
色香と存不やい過んと思ふ心り花瓶ふ櫻海棠投  
げ込と一間の山手海の景見を清きも障子  
とて切り二種三種の肴酒おきても話しぬ猪  
口と取り箸ととるさへ忘れとるの渡邊吉太郎  
と中村お梅のさし向ひみて野毛の四辺りへ新

築の家の二階と知られとりお梅の髪質の  
毛と前齒でフツリ噛と切りるがら吉太郎の顔と  
覗き込とアノヲ夫でハ松下亭の二階へ来て話して  
居とのが真正で京都へお出るささらるけれを成  
らぬいと一と一と溜息と吐て居る吉太郎の天窓と  
搔きまぐる「自己も太平無事のとときで馬がし話  
しぐるののなら些や拵つと身分が昇るうらと一  
て生れ故郷と遠く離れ京都あとりまで往の

獨身どくしんで居おる時ときでさへい否やみのどりのヲ増まて子安村こやすむらの  
雨あまやどりみ女房めいぼうと一入ひとりの見みつけて見みりやア間まも無なく  
呼よび迎むかえらるふあと所ところが二月ふたつきと三月みつきの書状よそと寫真しゃしん  
で樂たのしんで居おるけれな成ならるゐのいのいごからよ慾よくふも  
徳とくふも替かえられなずい否やどとが水戸みづとの御隠居ごんきよが鶉飼うらみきり吉きち  
左工門ざぐもんなるいのいと言いふ藩士はんしと京都きやうとへ上のせ安島帶あたまと  
カこるきぞと腹はらと合あせ公家衆くけしゆうのこららと持こへてこ以この來き  
薩州長州土州さつしゅうちやうしゅうとちゅうその外あの藩士はんしが京都きやうとへ入いり込こそ

横濱よこはまの港みなとと潰つぶすの赤あい髯ひげの奴やつらと追おひ拂はらふのいと  
言いふ騷さわぎが發かてり水戸みづとの屋やき下さの當主とうしゆと隱居いんきよ  
の中なが割われ藤田ふぢた込こふ結城ゆきぎ派はと二立ふたたちふ成なり同士どうし  
うちと押おむかつつめ京都きやうとであり日々あちち夜やふき切きとお張ちやう  
どりの強さいさぎぎあり薩州さつしゅうや長州ちやうしゅうであり外國人こくじんと戦せん  
争まりまと始はり昨日きのうふ今日けふと血腥ちひまくさる世よの中な志しし  
外あの所ところの何様なにやうやあ宜よが京都きやうとの天子てんしさまのあ膝ひざ  
元もとそのあ膝ひざりこが此このでろの様やうは騷さわがいく成なて

何時いんごき京都きやうと不軍ふぐんが始はじまらぬしと言いぬちる守護しゆご  
職しやくの會津あひづ彦ひこや所司しよし代の桑名くわな彦ひこの人数あんとずとま  
警衛けいゑいふ力ちからと盡つされても諸浪士しよらうしの勢いきさひ強大きやうたふふ  
中なく防ふせぎかねるふより此度このたび出来できと見廻組とまわりぐみの事宜しぎ  
ふよるし刀かたなざんまの切きの突つの強さぎもせ祢ね志し成なる  
らぬ役やく向むかき夫それも多た劍術けんじゆつの出来できるもの我え撰せんつ  
言いひ附つるつけ梅うめア、まア待まちて下くださいよ夫それ下くだる京きやう  
都とへ浪士らうしが集あつまり九條くじやうさぬの御家ごけ来らと切きたり

足利將軍あしかがぐんのお木像きざうの首くびと切きとりさてるので其様そのやう  
る乱暴らんぼうる強つよい人達ひとたちと捕とらえるお役やくと見廻組とまわりぐみと言い  
ふので座ざいますノ音ム左様さやうさ梅夫それぢやア此方こちらで  
捕つらえやうと志しとら向むかふで不動ふどうして居ゐま  
い刀かたなと抜ぬて切きてかりませう音刀かたなも抜ぬごらう音食くら  
ひ付つきも為するごらう音引ひ搔かきも為するごらう音サ梅其様そのやう  
るところへ往いくの音お止とまるさ音い音る祢ねへ音ア音く音く音否いやせん  
る死し介ける場ば所しよごらう音断とりが言いへ祢ねへのヨ殊とみ出で

來も志ねへ劍術どけれども此方へ來て教授と  
 恃むまど言れて見ると煽動られるとい知り  
 むぐら少しい其氣も成る奴サ一砲術がの菊地  
 さんのお話しで此方らのお頭の京都へ遣る  
 と金武場の劍術又上手が無るるか渡辺の京  
 都へ遣らぬと被仰てございますトお頭も左  
 様いつく下さるし自己も往き度多いと思ふか  
 横濱く見れば二倍も三倍も血腥く成て居る  
 ところどけ夫と無理ふ  
 断ると卑怯の様思われ  
 るも恨まど又寺岡



平右衛門の言ひ草でいそいそ幾何小禄の身で  
も先祖くろくして續と命重くも軽くも御恩み二  
ツい無いと思ふと今徳川のお家の大事の秋も當  
り雑兵の雑兵どけの力と盡さねなうね故何  
様でも京都へ往ずの義理が立まいと思つて居る  
のサ梅「さうなゆき申せを何程貴君と彼方へ上る  
のが否いやと言て手前勝手てまへがみお止め申しまうの為ま  
せんが京都きやうとみ浪人者より強い否いやなのが澤山居

ると言ひ升からそれ夫が案あんトられて往ゆませんワ浪人よ  
り強いと言ひの何なんどらう公家衆くげしゆう「梅「何「何  
が強いのだらう梅「鴨川とやらい水みづが宜いので京都の  
女おんなの色いろが白くつて肌かわが綺麗きれいと言ふでい有ありません  
言「其様そのような話わどが何様どうようゆりのあら有ありう梅「夫「ど  
み詞ことばくと取とりまましが優やさしくつと男おとこと湯ゆすのか上  
手て下くだでいますと祐へ其様そのような事ことも知しれ祐へ将  
軍家の御上洛ごんけごうやうらくみお供ともとして往ゆき彼地あつちみ在勤きんとして

居ゐとりのな元もと天あま窓まど白しろ髪かみ親おや爺ぢのまじ嫌きらひまくく片かたツつととりり  
女をんなみまままりり申まう一ひと記しのな無ないひ人ひとむむりり多おほりりつつとと言いふふ話わ  
一ひと下した有ありりととりりとと梅うめ一ひと夫おとこみみ上かみ方かたのの女をんな江え戸どのの男おとこのの無な否いな  
味あじとと一ひと氣き前まへみみ惚おぼれれ江え戸どのの男おとこ上かみ方かたのの女をんなのの優やさししいい取と  
りりままいい一ひと惚おぼれれとと言いふふでで一ひと有ありりまませせんん一ひと些ちニにアあ其その様さまな  
氣き味あじがが有ありりもも知しれれ移うつりりがが残のこららずず左さ様さまとと一ひと記しみみも  
往いぬぬへへ一ひと夫おとこどどけけととどどもも江え戸どでで女をんなみみ好すれれるる様さまなな男おとこ  
一ひと京きやう都とのの女をんなもも矢や張ちやう惚おぼれれまますすととららうう一ひと声こゑままアあ理りとと押おしして

見みれればば其その様さまななののどどららううサさ一ひと女をんなのの方かたでで惚おぼれれてて優やさししくく志し  
ととらら男おとこのの方かたででもも惚おぼれれるる氣きなな成なりりまますすととららうう一ひと其その  
處ところがが人ひと情じやうどどららううがが根ねとと掘ほりり底そことと轉ひ倒たかかへへとと嚴きび  
一ひと尋たづ問もんふふ出でッっかかををすすののどどななアあトと言いへへととおお梅うめのの真ま  
面おも目めみみてて吉きち太た郎らうのの顔かほととおおいいつつとと見みははめめ噀ありりとと息いき吐つ  
一ひと夫おとこどどかからら浪なみ人ひとよよりりのの強つよいいとと言いふふののでで有ありりままたた一ひと京きやう  
都とのの女をんなががカか一ひと貴き君きみががあありりちちへへおお出いるるさされれをを直ただしし女をんながが  
惚おぼれれまますすととららうう左さ様さまままるるとと貴き君きみもも又また彼あ方ちのの女をんなみみおお惚おぼれれ



みさうり此方らの事なぞいふ思ひ出しも成さるまい  
夫へモウ何様み水性とみさうらうと貴君み女の惚るの  
の吾侪の身みとり嬉し事下り有まはぐ吾侪とく貴  
君の女房みりて遣るしおつてやつても親父さんや慈母さ  
んが承知下ふ娘も成と訊下りる貴君の女と諺すの  
がお上手どとの皆さんのお話し為て見ると當座の気  
やすめ嬉しがらせて置て下さるのりも知れあひと思  
へむ吾侪み薩州や長州の浪人より京都の年増や

新造の美女がまてふ否何より強うございますワ「  
入り組ど玄関つきで氣楽な事と言て居らア夫より  
り自己の了簡ぢやア何程親類の中どろろと言て松  
下亭へ置ちやアお前がどんく水性なると覺え情男む  
くり梅へると言ふ評むんどろろ早く引取て仕舞う  
と思つて居るのどが左様まるふの江戸の両親も一  
應話しぬしお前の親父さんや慈母さんみも話し  
とまらけれを成らざるるろ菊池さんが江戸へ



あつて居るのサ梅あれ彼が水性と言ふの下座ございますり  
「吉訳らざア宜ゆよう折よりから二階よのつひ下しと往來ゆきの人の話ひと」  
声こゑ「いよま京都きやうと下の攘夷鎖港ざういさこうの論ろんが沸騰おへあがり何様どう  
下も戦争せんさうの始はまる模様ようよう夫それはいて今度出来こんどと見廻まわ  
り組ぐみといふの強つよい人ひとをり撰えむの下此地このちの劍鎗けんさうの誓ちか古  
場ま金武場きんぶちやううも手利てきをりりが撰えり拔ぬれ二三日ふたみのうち  
み京都きやうとへ出立いするさうぞと女をんなと軍いと為なるのあら鼻はなと  
分捕ぶんとらとる位くらい下濟すむりり宜ゆぐ男子おとことしの軍いはれめんど

千人万人敵せんまんまんてきと討うちとり高名かうなても一度手前いちどてまへが討取うちとられ  
りやア夫それでお仕舞しまひ自己おのれふんざア何程いか金かねと貫ぬつても一  
ツ間違まちがへの切きとりをつたり為なる様ようる所ところ真平まへとアと安やす  
さへ哀あはしい辻占つじうらとお梅うめの目めりとみ泪なみだと浮うれ吉太郎きちたろうの顔かほ  
とジじイツいとつつめ思おもわず溜息なげいきはくるるべい

第十五回

茲こゝふままと書肆しよし俵屋横田清兵衛たわやよこせのせいべゑの妻つまお岩いわの夫ととの行いひ  
の此程このほどみ至いたりまま隠かくすと多おほきと案あんト勤王きんおうとやや

の人<sup>ひと</sup>が折々<sup>しりしり</sup>守護職<sup>しゆごしやく</sup>や所司代<sup>しよしよしろ</sup>の手<sup>て</sup>に捕えらるれを其<sup>その</sup>  
浪士<sup>らうし</sup>とちの若<sup>わ</sup>や夫<sup>とと</sup>と同盟<sup>どうめい</sup>とやらの仲間<sup>なかにま</sup>で夫<sup>とと</sup>のこ残<sup>のこ</sup>  
言<sup>い</sup>ひとてたら夫<sup>とと</sup>も又<sup>また</sup>捕えらるるに必定<sup>ひつてい</sup>と言<sup>い</sup>ふて小<sup>こ</sup>  
常<sup>つね</sup>るんぞの事<sup>こと</sup>ふかこつけ包<sup>か</sup>を隠<sup>かく</sup>してお在<sup>い</sup>る傍<sup>そば</sup>ら  
らくちの出<sup>で</sup>し様<sup>やう</sup>もるし彼<sup>かれ</sup>振<sup>ふる</sup>る時<sup>とき</sup>あ<sup>あ</sup>ん平時<sup>へいじ</sup>信心<sup>しんしん</sup>の北<sup>きた</sup>  
野<sup>の</sup>の天神<sup>てんじん</sup>さるへ御願<sup>ごねん</sup>と<sup>と</sup>うけ夫<sup>とと</sup>の無事<sup>むじ</sup>と祈<sup>いの</sup>るより外<sup>ほか</sup>  
い、そいと女<sup>とんな</sup>の心<sup>こころ</sup>より幼稚<sup>ちよじ</sup>き子供<sup>こども</sup>の姑<sup>おば</sup>や妹<sup>いもうと</sup>お楽<sup>らく</sup>と  
寐<sup>ね</sup>ると僥倖<sup>さうしん</sup>晝間<sup>ひるま</sup>の家事<sup>けじ</sup>の用果<sup>ようぐ</sup>るとまぢ毎夜<sup>まいや</sup>ひそくふ

道の遠<sup>とほ</sup>きも淋<sup>さび</sup>しきも厭<sup>いと</sup>えず北野<sup>きたの</sup>の天神<sup>てんじん</sup>の社<sup>やしろ</sup>へ参詣<sup>さんげい</sup>  
るし夫<sup>とと</sup>の身<sup>み</sup>の上<sup>うへ</sup>の無事<sup>むじ</sup>平穩<sup>へいあん</sup>とぞ祈<sup>いの</sup>りける然<sup>しか</sup>るゆ<sup>よ</sup>ゆ  
屋寅吉<sup>やとらきち</sup>の横田清兵衛<sup>よこたせいはゑ</sup>がま<sup>ま</sup>んく小常<sup>こつね</sup>お現<sup>うつつ</sup>とぬ<sup>ぬ</sup>じ自家<sup>おのゝかへ</sup>  
ふの半日<sup>はんじつ</sup>とも居<sup>と</sup>らぬと附<sup>つ</sup>けこそ日々<sup>ひかひ</sup>お横田<sup>よこた</sup>の家<sup>いえ</sup>へ訪<sup>あそ</sup>  
れ來<sup>き</sup>て問<sup>ま</sup>がる暇<sup>あそ</sup>がるお岩<sup>い</sup>と挑<sup>い</sup>めどお山<sup>やま</sup>石<sup>いし</sup>の清兵衛<sup>せいはゑ</sup>が  
身<sup>み</sup>の案<sup>あん</sup>トらるれお一人<sup>ひとり</sup>おでも悪<sup>わる</sup>ま<sup>ま</sup>とて<sup>て</sup>の害<sup>がい</sup>の片端<sup>かたは</sup>と  
るらんお計<sup>はかり</sup>られずと思<sup>おも</sup>ひ風<sup>かぜ</sup>又<sup>また</sup>吹<sup>ふ</sup>る青柳<sup>あおやなぎ</sup>の餘<sup>よ</sup>所<sup>ところ</sup>又<sup>また</sup>  
流<sup>なが</sup>しく置<sup>お</sup>くと以<sup>も</sup>て寅吉<sup>とらきち</sup>の宜<sup>よろ</sup>い氣<sup>き</sup>ふるり考<sup>かんが</sup>えて見<sup>み</sup>てお

ぐつと自己惚か岩の何様でも僕も北山時雨濡て見  
たいと思つて居るのへ目元の紅葉の色も現はれ通  
天橋下詠めとよりも確ど言ふも清水の音  
羽の滝より細そりしと女子んと来て居るうら何  
此方香りの宜い稲荷山の松茸どとて多し入目の  
黒谷と忍んで一寸あゝ坂の関路と迄は往ぬ道理  
此方もまゝ老婆どの妹どの下婢どのとゞみ邪戸も  
のが居るのやあもぐ口説訳も往福へかゝ小恋れつ

とくつと成らなかつとが此程お岩の毎晩どこへ出  
りけるうら段々探索してえとら北野の天神さまへ  
参詣の往の違ひるゝ其参詣の元素とゞせは梅と  
一生絶ますから清兵衛とより寅さんと偶して下さ  
いと言て願ふのりも知れ多しと思ふと魂へ雲がわつと  
様も暗くあり又湯下蒸しと様も煙が出て来て居ても  
立ても落着ぬうら今夜下三晩うらして北野の境内の  
人気をなれと所も居て奴わがコロく遣て来るのと押

へと區まつと蚤あもと思おもひの外みかまの松まつふく風かぜの音おとむりり姿すがたの現あられ  
見えぬみえぬ閉と口くちハテ今いま鳴なる鐘かねの戌い刻つどが又また待まち不なうけ  
と食くつとと往ち来きの入ひの足あ音こみ耳みみと聳そと目めと配く  
り折よくりホツと溜ため息いきと嘯うき立たる寅とら吉きちの居ゐるとも知しら  
ず清せい兵べい衛ゑの妻まのお岩いわの宵よ暗やの空そらより闇くき気きの曇くも  
りと僅わずかり又また照てす提てい灯ちんの光ひり又また道みちと端はりと来きか  
る松まつの下した蔭かげより冠かぶりし手て拭ぬ取ひうのけて「俵たわ屋やの内うち方かた  
モシお岩いわさん何ど方ちらへと言いひるがら突つ然と立た出でる寅とら吉きち

お折とりあらしの思おもひるがら流なが石いみ逃にげても往ゆれねむ立た止と  
まりて莞あつ示し笑わらひ「お寅とらさんやどぞいますう何ど様よう一い  
今いまどろ此こ様ようところみ提てい灯ちんもなくお在いのいお侍まじ合あせ  
のお人ひとでもど座ざいけりと言いれて寅とら吉きち天あま窓まどと搔き「  
イヤ待まち人びとの大おほありで氣きをり揉もて居ゐとのどぞ夫それより  
へまアお前まえさんの此こうを淋さしい夜よるの道みちとお供ともも連つれずみ  
何ど地ちらへお在いのど座ざへやすと聞きれてお岩いわの口くち隠かくり  
「イヤあのヲ清せい兵べい衛ゑがこ先さきのアヲお別べつ當とうさるのお家うちへ



上りお酒と  
 戴いこと見えて何り  
 知らぬが用どろろ

一寸来いと言ふ手紙と此通りと帯の間へ手を入れ  
 少一探一兩三家へ忘れて来とつけアタ夫でお別當さ  
 まの所へ往のさ今頃ふ成り困るぢやア無いゆ松へ  
 とい世と忍ぶ仮の名を實の何とら本名が有りさう  
 誤関兵衛のせりふ下いむいガ供とも連ず只一人  
 と来てその上ふ一体そさ々の風俗の前垂掛けと言ふ  
 のガ怪一の何でも私の考えぬの當社天満大自在天  
 神さま人御願とかけ梅と一升一斗一石命の限り根





さうも祓へ濕然と〜と小座敷の何る茶屋へあがり  
媒妁のりずの相互ひみ敵と仕合の三々九度など  
濃てり往すとも浅り二人りて飲の宿祢當麻の躰早  
の取組がやつて見とさの身の願ひさる〜一所ふお出  
るせへト言ど此方の取りあはず「何どよ寅さん小  
ンニお酒ツくさの酔ておいでのご子さる〜鬼子母神  
さまの様み子供の有るお婆アさんと捕えて愚弄  
と祇園町で待て居ませうみ早く往ておあげなさい

吾侪も餘り夜が更ると悪いから何の用どらめて  
來ませうアレサマア杖と放してと言とら移へト振拂ひ  
ても狂ひき止め身体を傍へ摺りよせて「是れ志どら  
お岩さんと為とてが彼様うち付ふ謎をかけても心  
で解て表べふへ解ぬ振りして憎らしい夫のなる不  
ど泥水の中と揺とまゐる猫や狐の連中でも惚と人よ  
の恥う〜の下十分口がきけぬと言ふから年増盛り  
のお前さんでも世帯固氣のお内茂さんる〜志の道



ちの出であるさで酒狂ひや女ぐるひ何程男の働きで  
も餘りどうい思ふけれども矢張内で苗ちのむんサ保丈で何  
様考えても損どうく此ころみ芝居でも見えな往きま  
せう其時の何卒連て往て下さいナ彼言ふ場所へは  
ひいく往と事がそいので此も容子と知らるいから  
サ今夜のお茶屋のお時までお預けみしておいて  
早くお別當所へ往き用の支と使るいと氣又掛つて  
落着るいくく何卒放して下さいし言へど取りたる手と

放さげ倍傍へまりようてお前さんの方でも其心底と  
徐々と現をしかけて下さりや私も實と打まけく嘖  
つつ仕舞ふか見栄のそいとこ何様しとこやら知らる  
いがお前さんが不斗ようく多り惚とおの字が腸へ一目み  
漆と徹り思案の外の横戀慕でも堅よかぶりと振  
せしいと思ふて茂々お宅へ上れど姑婆さんやお楽さ  
んお飯林火まで邪々おり異と減んど掛ことや色目  
と遣ふか精一をい是下い蔭の無多こがれ何卒入目の



夜あらし也  
 東はた  
 十三年

樂山 記



桂桐野の  
 両士暗ふ  
 お岩とす  
 くふ

るの所ところで杖せう一ひとたの口説くたひて見みると思おもひねん念ねんが屈くつい  
たり嗅くさ出いしる北野きたのの夜參よまゐり是これ僥倖えんじやうと今日けふで三晚さんばん  
待まちりひありよ宜よい首尾しゆびと芝居しばいの時ときまで延のびされませう  
ササアアお出いと手てと採とり引ひき立たて往ゆく男おとこの力ちから何なんと詮せん方かた無な  
き後方ごほうよぬなくくと立たし侍さむらいが物ものとも言いはず寅吉とらきちの衫えんぎ首握くびかつか  
んでッッデンデン嘯せう松まつの根元ねもとへ投出なげいせを寅吉とらきち仰あが天てんアア痛いたタタと  
弱よわりまぐぐも起おき上あり彼かの侍さむらい向むかをんと為なる時とき又またも松まつ  
蔭かげより現あれ出いる侍さむらい一人手ひとりてと差さし伸のびで寅吉とらきちが二ふた腕取うでと

るよとよととええとええししが筋斗しんとううとせて又また轉まぐ投付なげつけられて  
寅吉とらきちのこりや堪たまらぬと天窓あままとわへ一目散いちもくさんお逃にあさりさり  
お岩いわの地獄ぢごく下くだ佛ぶつの思おもひ謝あやると言いんと為なる時とき前まえの  
侍袖さむらひそでと振ふり早往はやあくと知しらすれを辞宜しじぎと為なる手てで提て  
灯ちんの光ひらりと袂たもとふ掩おほひひり足音あしな隠かくして天神てんじんの社やしろの方かたへ  
ぞ往ゆくとりける後あとから出いし侍さむらいが四辺あつちと窺うかがひ桂小五郎かつらごろう  
君くんうと問とむ此方こなたの侍さむらいも声こゑと竊ひそめ中村半次郎君なかつらはんじやうくんうう喚さざ  
お待まちかねね下有あつつとらうらうアア何なん僕がくも只今ただいままま人ひとししととろ

シテ<sup>シテ</sup> 俵屋の清兵衛<sup>せいへいゑ</sup>の<sup>せいへいゑ</sup> 兼て頼<sup>たの</sup>と<sup>たの</sup>おき<sup>おき</sup>ら<sup>ら</sup>通<sup>と</sup>り<sup>り</sup>る<sup>る</sup>れ<sup>れ</sup>を<sup>を</sup>最<sup>も</sup>  
 ち<sup>ち</sup>や<sup>や</sup>程<sup>ほど</sup>る<sup>る</sup>く<sup>く</sup>参<sup>ま</sup>る<sup>る</sup>下<sup>した</sup>で<sup>で</sup>ざ<sup>ざ</sup>ら<sup>ら</sup>う<sup>う</sup>一<sup>ひと</sup>只<sup>ただ</sup>今<sup>いま</sup>君<sup>きみ</sup>の<sup>の</sup>投<sup>な</sup>ぐ<sup>ぐ</sup>ら<sup>ら</sup>ひ<sup>ひ</sup>と<sup>と</sup>る<sup>る</sup>  
 男<sup>おとこ</sup>の<sup>の</sup>一<sup>ひと</sup>譯<sup>わけ</sup>り<sup>り</sup>知<sup>し</sup>ら<sup>ら</sup>ね<sup>ね</sup>ど<sup>ど</sup>清<sup>せい</sup>兵<sup>へい</sup>衛<sup>ゑ</sup>の<sup>の</sup>妻<sup>つま</sup>の<sup>の</sup>お<sup>お</sup>岩<sup>いわ</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>ん<sup>ん</sup>う<sup>う</sup>し<sup>し</sup>思<sup>おも</sup>  
 ふ<sup>ふ</sup>女<sup>むすめ</sup>へ<sup>へ</sup>横<sup>よこ</sup>恋<sup>れん</sup>慕<sup>ぼ</sup>と<sup>と</sup>る<sup>る</sup>や<sup>や</sup>野<sup>や</sup>良<sup>ら</sup>由<sup>ゆ</sup>ゑ<sup>ゑ</sup>清<sup>せい</sup>兵<sup>へい</sup>衛<sup>ゑ</sup>は<sup>は</sup>ま<sup>ま</sup>り<sup>り</sup>代<sup>しろ</sup>り<sup>り</sup>  
 と<sup>と</sup>戀<sup>こ</sup>して<sup>して</sup>遣<sup>や</sup>つ<sup>つ</sup>と<sup>と</sup>の<sup>の</sup>一<sup>ひと</sup>所<sup>ところ</sup>と<sup>と</sup>僕<sup>おれ</sup>が<sup>が</sup>外<sup>あ</sup>焼<sup>や</sup>で<sup>で</sup>ま<sup>ま</sup>く<sup>く</sup>轉<sup>ころ</sup>ら<sup>ら</sup>と<sup>と</sup>お<sup>お</sup>  
 笑<sup>わら</sup>へ<sup>へ</sup>此<sup>こ</sup>方<sup>なた</sup>も<sup>も</sup>共<sup>とも</sup>に<sup>に</sup>打<sup>う</sup>笑<sup>わら</sup>ひ<sup>ひ</sup>木<sup>き</sup>蔭<sup>かげ</sup>に<sup>に</sup>寄<sup>よ</sup>り<sup>り</sup>て<sup>て</sup>ど<sup>ど</sup>立<sup>た</sup>ち<sup>ち</sup>と<sup>と</sup>り<sup>り</sup>け<sup>け</sup>る

春雨文庫第四編卷之下終

開明 小説 春雨文庫 第四編ヨリ 近世の烈婦孝女乃傳説を  
 引續キ出版 記シテ面白キ珍書あり

松村春輔編輯 復古夢物語 初編ヨリ 出版 這ハ明治太平記の前篇ヨリ嘉永  
 六年亞米利加使節相州浦賀へ來船  
 以來明治元年伏見戦争迄委<sup>く</sup>  
 たる面白キ書也

和田定節編輯 参考鹿兒島新誌 半紙本 初編ヨリ七篇 此書西国征討の始末を詳細ニ  
 述全部十五冊 志<sup>る</sup>者<sup>第一</sup>の<sup>実録</sup>あり

東京書肆 大島屋 武田傳右衛門  
 弥左工門町上二番地

明治十二年十二月三十日

